

氏名	チン ホウジョ 陳 芳如
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第8号
学位授与日	平成23年9月30日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	台湾日月潭におけるコミュニケーションデザインによる地域イメージ形成
審査委員	主査 武蔵野美術大学教授 原 研哉 副査 武蔵野美術大学教授 柏木 博 副査 武蔵野美術大学教授 小林 昭世 副査 武蔵野美術大学名誉教授 向井 周太郎

内容の要旨および審査結果の要旨

陳芳如は、地域における観光資源の形成をデザインとコミュニケーションの観点から研究を進めてきた。

地域がその独自性を自覚し、他の地域から尊重され、その土地固有の文化とともにいかに誇りを持って魅力的に存続していけるかという問いは、生活や文化の質的向上を考えるデザイン学の本質に繋がる思考であり研究である。

観光資源の形成を、賑わい創出のための観光開発のプロセスとして捉えず、むしろ、地域の本質についての深い洞察を、そこに住む人々や、来訪する人々の認識にいかにかに生み出して行けるかという、認識深化のプロセスとして捉えて行くことが、この研究を指導して行くにあたってのポイントであった。

陳芳如は、具体的には台湾の「日月潭」という湖とその周辺地域を研究対象として定め、この地域の観光資源の形成について調査、考察し、最終的には、資源として取り出せる景観の特徴を、デザインの展開事例として実践するプロセスに踏み込んでいる。

この姿勢は、まさに物事に対する実践的な局面を開いて行くデザイン学ならではの研究アプローチであり、その成果の質的な充実と同時に評価できる点であると考えている。

研究の方法として、陳芳如は、数回に及ぶ現地調査を実施し、台湾の人々の間で抱かれている日月潭のイメージを、記憶をたぐり寄せながら絵を描いてもらうなど、独自性のある方法で分析・抽出し、霧が多く独特の幽玄の美ともいべき日月潭の現状と、明るく鮮明な水と森の類型的なイメージとして捉えられている人々頭の中にある日月潭のイメージ

とのギャップを指摘してみせた。

霧や靄が多く発生し、霞む大気と静謐な湖面が織りなす荘厳なグラデーションは、この湖の景観を極めて特徴的なものになっている。「霞む景観」は、中国の南宗の水墨画などに顕著に見られる景観価値の見立てであるが、南宋時代の都であった杭州の西湖の景観と比較しても、日月潭は決して劣らず、その茫洋たる霧の湖面と、対岸にほとんど人工物の見当たらない、自然の景観の美しさは世界に傑出した独自性を持つ。

この希有な自然景観を、まさに資源として認識し、それを鑑賞する視点を明示すると同時に、それを守って行く心理を、現地の人々のみならず、来場する環境客にまで生み出して行くことが、この地域の観光地としての成熟に不可欠であると、陳芳如は指摘している。

人間は自然の風景のままを価値ある「景観」として認識するまでに時間を要した。たとえば田園風景であるとか、葡萄畑であるとか、牧場に点在する赤いサイロの屋根であるとか、人工物が自然に対峙して存在を主張する時、人間はそれを価値ある光景としてある感慨を持って眺めるようであるが、自然の景観そのものに「価値」を見立てて行く認識に到達するには、案外と時間がかかっている。自然は人類の長い歴史において、人間という存在の前に立ちはだかる野生であり未開なる危険性そのものであった。「景観」や「情景」としてその価値を見立てて行くのは、景観論的認識の成熟を待たなくてはならない。

煩わしい地形の凸凹ではなく、優美なる起伏を持つ大地のつらなりとしてそれを鑑賞する視点を持ち、視界を遮る厄介な霧ではなく、美しいグラデーションをなす水と空の幽遠な景観としてこれを評価するには、それなりに知的な、情景評価の認知水準が必要となる。

観光資源の形成は、言い換えればまさにこうした高度な景観認知を、それに触れる人々にいかに広げて行くかという、アイデンティフィケーション、あるいはコミュニケーションのプロセスに他ならない。逸話的な由来からでっち上げる「観光物産品」の開発からこれを考えるのではなく、その土地や自然が本来持っている固有性を、いかなる景観価値として認知させて行くかという、コミュニケーションのデザインこそ、世界中の観光資源が、未来において守られ、光を放って行くために必要な営みであり、認識なのである。

陳芳如の研究において、このプロセスは、下記の手順で進められた。

- 1：土地の位置や気候、風土、自然条件や特徴に対する客観的な把握
- 2：特徴や景観におけるオリジナリティの抽出と整理
- 3：景観論的アプローチからその土地の価値を見だし記述する
- 4：上記の情報をデザインの手法によって総合し、
コミュニケーションデザインの装置としてまとめあげる

上記のプロセスにおいて、本学名誉教授の向井周太郎、本学教授の柏木博、小林昭世、原研哉が研究論文を査読した。事前審査では上記項目3の、景観論的視点のさらなる研究と記述が必要と判断し、それを指摘するとともに追加研究を指示した。また、当論文の中で繰り返し述べられている「未知化」という概念に関しては、担当教官の原研哉の論説に準拠した記述となっているが、ロシアフォルマリズムにおいてシクロフスキーが提唱した「異化」の概念を参照し、その類似性と差異について認識しておく必要を指摘し、その追加研究を指示した。

結果として、本研究は博士の学位を与えるに相応しい水準に達するものと認められ、公聴会において承認された。本研究における「景観」を価値として操作する手法の確立は、今後の地域デザイン研究に、有益な示唆を与える始点を示すものとして高く評価できるものであると考える。



図1 アジアの中の台湾と日月潭

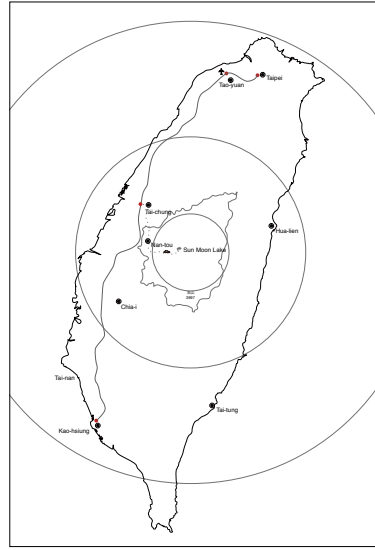


図2 台湾の中の日月潭



図3 1925年の日月潭

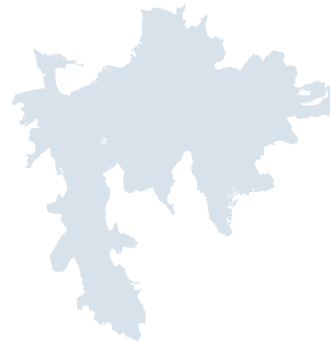


図4 2000年の日月潭

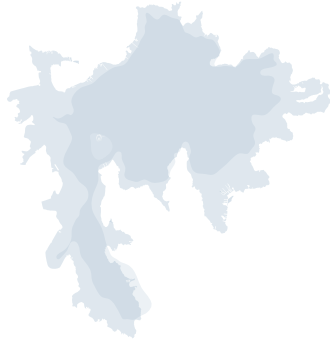


図5 1925年と2000年の日月潭を重ねる

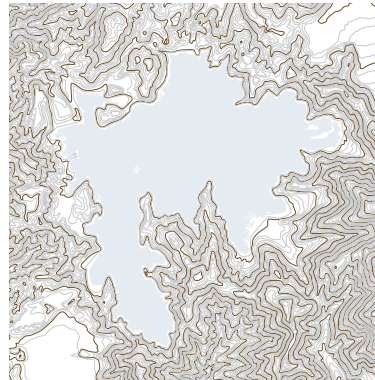


図6 等高線による日月潭の輪郭

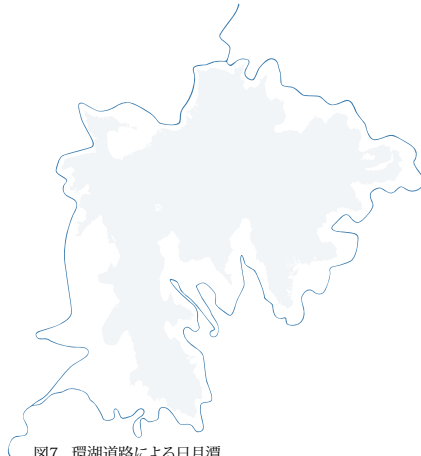


図7 環湖道路による日月潭

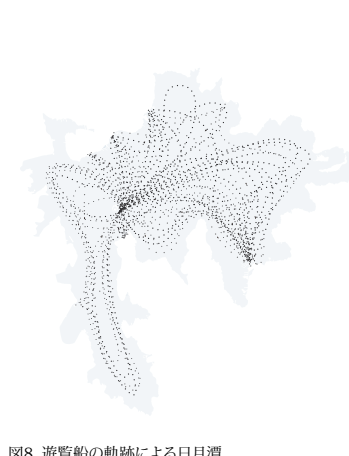


図8 遊覧船の軌跡による日月潭

日月潭

SUN MOON LAKE



図9 日月潭のロゴタイプ

図10 日月潭のシグネチャー



図11 シグネチャーの応用:ポストカード



図12 シグネチャーの応用:ポストカード

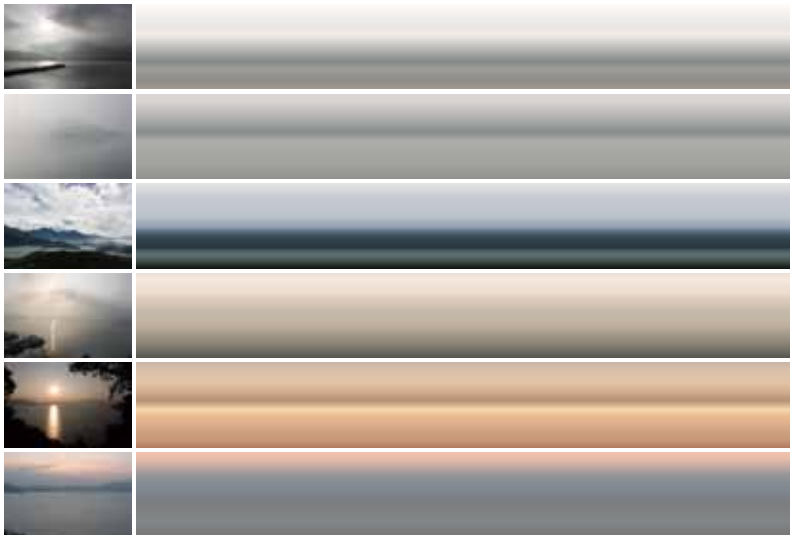


図13 横長いグラデーション

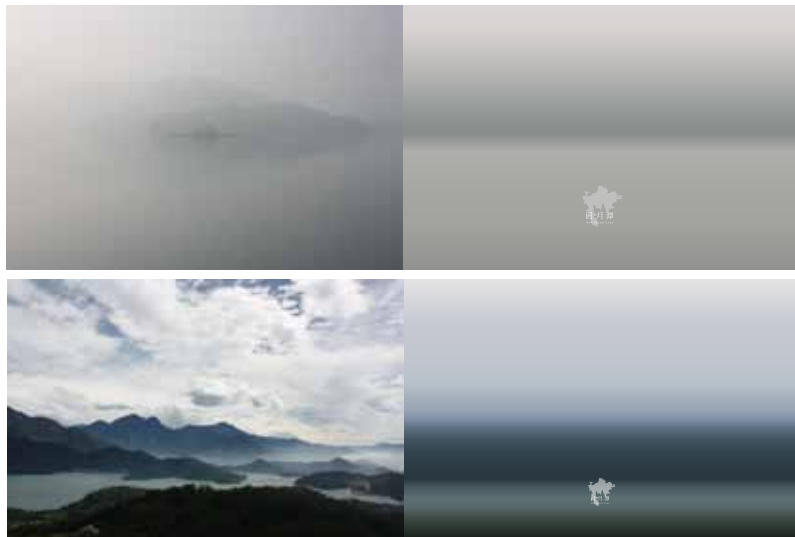


図14 グラデーションの応用:ポストカード